

# 有栖山公園通信

其之拾參

平成十七年八月十四日（コミケ六十八）  
有栖山公園 (<http://www.aiceyama.jp/>)  
ありすやま ぼどう (budou@aiceyama.jp)

はじめまして&おひさしぶり。本日は御立寄りありがとうございます。  
「有栖山 葡萄(ありすやま ぶどう)」と申します、しがないSS書き同人屋でございます。

無事に今回も当選いたしましたして、3年連続6回目の参加となりました有栖山公園。  
なによりも昨年は個人的な都合によりプライベートな時間を作ることがなかなかうまくいかず夏・冬ともにオフセットを落としてしまいコピー誌でお茶を濁すという形になってしまいました。本当に心苦しい限りでした。

が、今回はようやくきちんとした形で販売できました。無事に入稿も終わっており、印刷トラブルでも起きない限り新刊が並んでいることでしょう。有栖山公園初の厚さ、今までの倍となっています。内容もまだまだ続くのですが、これから毎イベントごとに連載続けていければなという感じです。

さて、辺りを見渡してみると(サークルカットですが.....)君望サークルもかなり減ってしまったようで。私はまだまだやっていく気なのですが、いつまでこのジャンルでスペースが取れるのが疑問ですねえ。かといって、委員ちょっとかまなかとかこまきとかそっちに流れることも無いでしょう~(え まだまだがんばっていきますよ~。私の書きたい恋愛お呪いに、遙程似合うキャラは居ないので。

ということで、また次回冬コミでおあいませう~。

彼は廊下を疾走する、全力で。  
元はなんで走り出したのか、走っている鳴海孝之本人すら忘れていた。ただ、追われるから逃げ走るといっただけだ。

「まちなさいっ、たかゆきっ」  
すごい勢いで追いかけてくる彼女に、立ち止まれるはずも無く走っていた。廊下は走らないなどという張り紙など関係ない。放課後の校内を駆け巡っていた。

始めのうちは良かったが、毎日鍛えている相手との体力勝負では分が悪い。彼女のフィールドは水だと思っていたが、速瀬水月は水陸両用の万能プレーヤーだったらしい。徐々に追い詰められる孝之は、校内の配置を酸欠気味の頭に描いた。体力差から行くところ、直線勝負になれば圧倒的に不利である。出来る限り構造の複雑なところ、それも分岐が豊富にあるルートが望ましい。一瞬でも足止めできればそれでもかなり有利にこ

とが運べるだろう。  
孝之は体力の続くところで一気に階段を駆け下り、次のフロアで廊下を少し移動する。ちょうど校舎が直角に曲がっているところで、その両側に階段が配置されている。一フロア下では昨日から工事が行われており、双方の階段を行き来することが出来なくなっている。そのことを彼は知っていた。彼は角を曲がると、もう一方の階段に差し掛かる。そしてその階段を一気に駆け下り始めた。

水月が追いかけて階段を降り切ると、ちょうど孝之が窓からもう一方の階段を駆け下り始める姿が見えた。  
彼女は廊下を移動するよりもそのまま下のフロアに移動したほうが、窓からどこに行くか見ると判断する。そして来た階段をそのまま一階へと駆け下りていった。

廊下を駆け下り窓越しに反対の階段を見ると、角から遠ざかる方向へ走る孝之の姿が見えた。が、工事用のパネルが彼女の行く手を見事に遮断していた。孝之は廊下を駆け抜けると、そのまま次の角を曲がる。そして速瀬の視界から完全に消えた。

「見事にやられたわ……」  
水月は悔しさに廊下を大きく一度踏みつけると、元来た教室へ戻り始めた。

逃げる孝之は、そろそろ体力の限界に差し掛かっていた。酸欠の体が悲鳴を上げている。  
角を曲がったところで少し開いていた扉を開けると、その中に体を滑

らせ、閉じた扉に背中を預け座り込んだ。静かにゆっくりと呼吸を整える。耳を済ませて追いかけてくる足音は聞こえなかった。  
どうやらうまくトラップに引っかかってくれたらしい。

彼は一息つくくと、もう一度深呼吸した。つんとつく消毒液の匂いを鼻に感じる。彼は辺りを見渡すと、そこは保健室であった。ちょうど学校医も保健委員も出払っているようだ。それでいて鍵が開いているとは、なんとも無用心である。あるいはほんの少しだけ席をはずしているのかも知れない。

とりあえず、保健室にはベッドがある。孝之は疲れた体を癒すのに移動し、靴を脱ぎ捨てるとベッドに横になり一息入れる。  
彼が軽くうとうと始めたとき、扉の開く音が聞こえた。孝之は一瞬身を強張らせたが、入ってきた人物のため息に水月ではないことがわかり緊張を緩めた。

「あら？」  
その声は、ベッド際のカーテンが引かれていることへの驚きだったようだ。近づく足音に、孝之は軽く緊張した。体調が悪いから休んでいるといえ、そう問題も無いだろう。疲れ果てて体調が悪いのは事実なのだから。

手がカーテンにかけられ、合わせ目から少し姿をのぞかせた彼女と目が合った。赤い襟に丸い眼鏡の少女。一年の生徒だということはすぐにわかった。白髪は学年ごとに制服の色が決まっているのだから、それは簡単だ。しかし、孝之には彼女のことを見覚えがあった。しかし、どこであったことがあるのか今ひとつ記憶がはつきりはしなかった。

「なる……みせんはい？」  
彼女は彼の名を呼ぶと、驚きと何かが入り混じった表情で孝之のこのことを見つめていた。孝之自身も、名前を呼ばれたことに驚き彼女を見つめていた。

「えっと、どうして俺の名前を……」  
孝之が聞くと同時に、彼女はカーテンを抜けベッドに歩み寄った。  
「鳴海先輩は有名ですから。具合、悪いんですか？」

彼女はにっこりと笑うと、孝之の顔をじっと見た。確かにこのところ、学園ではちょっとした有名人名人になっているとは聞いていたが、こんなところで実感するとはと孝之は思う。

「ああ、すこしね。ちょっと疲れてさ」  
孝之はあいまいに答えると、愛想笑いをした。彼女はその言葉にやさしく微笑むと、「少し待っていてください」といって席をはずす。戻ってきたときには、彼女の手にはグラスと錠剤があった。

「栄養剤とお水です。気休めにはなりますよ」  
そういって彼女が孝之に差し出す。彼はそれを受け取ると口に含んだ。何の変哲も無い糖衣の錠剤が二つと、少し後口の甘い水を一気に流し込んだ。

「もう誰も来ませんし、私も少し雑用を頼まれてるので。お休みになっていてください、私が帰るときに起こしますから」  
彼女の微笑に安心した彼は、体のたるさも手伝ってその提案をそのまま受けることにした。

「それじゃおやすみ」  
「はい、いい夢を見てくださいね」  
彼女のそんな言葉とともに、孝之は眠りについた。  
《恋戦》 《この緑に美しい世界》 To be continued